

## 「サンバ」 ★★★

2014（平成26）年11月12日鑑

賞＜GAGA試写室＞

監督・脚本：エリック・トレダノ、オリビエ・ナカシュ

サンバ（フランスにやって来たアフリカ移民の青年）／オマール・シー

アリス（移民支援協会のボランティア、燃え尽き症候群の元キャリアウーマン）／

シャルロット・ゲンズブール

ウィルソン（ブラジル移民だというサンバの相棒）／タハール・ラヒム

マニユ（移民支援協会のボランティア）／イジア・イジュラン

ジョナス（収容所で知り合ったサンバの友人）／イサカ・サウドゴ

2014年・フランス映画・119分

配給／ギャガ

### ＜2匹目のどじょうは？その第1のテーマは？＞

首から下が麻痺した大富豪と、スラム街育ちの黒人青年が「最強のふたり」になったのはなぜ？そのキーワードは、同情していないこと！そんなテーマがメチャ面白かったうえ、あくまで陽気に本音のセリフを次々とくり出す、黒人青年役を演じたオマール・シーの魅力が際立っていたためか、彼は『アーティスト』（11年）（『シネマルーム28』10頁参照）を押しつけてセザール賞の主演男優賞を受賞した。

そんな『最強のふたり』（11年）（『シネマルーム29』213頁参照）の大成功を受けて、エリック・トレダノ監督とオリビエ・ナカシュ監督がオマール・シーに「2匹目のどじょう」を打診すると、当然オマール・シーは快諾。エリック・トレダノ監督とオリビエ・ナカシュ監督が前から設定していたテーマは「不法移民問題」だったから、オマール・シーはその意味でも主演に最適だ。

本作でオマール・シーは、フランスのレストランで皿洗いから料理人に採用されようとしているアフリカからの（適法）移民サンバを演じているが、本作でサンバの「最強のふたり」になるのは、ブラジルからの移民（もっとも、これはウソ・・・）ウィルソン（タハール・ラヒム）だ。不法移民問題は日本ではあまり顕在化していないが、フランスでは大きな社会問題になっているから、それをテーマにした映画が注目されるのは当然。さて、『最強のふたり』のエリック・トレダノ監督、オリビエ・ナカシュ監督とオマール・シーが再びタッグを組んだ、「2匹目のどじょう」の成否は？

### ＜第2のテーマは燃え尽き症候群！＞

私は「燃え尽き症候群」の実態を知らないが、『最強のふたり』の大成功の後、エリック・トレダノ監督とオリビエ・ナカシュ監督は燃え尽き症候群になったらしい。そこで「2匹目のどじょう」を狙った本作に取り入れた第2のテーマが、それだ。

プレスシートによると、2人の一致した問題意識は「“移民問題”と“燃え尽き症候群”、この2つは、実は根っこを同じとした一つのテーマだ」ということ、つまり「日々に忙殺され、“人生のための仕事”のほが、”仕事のための人生”にいつしかすり替わってしまっていることに気付いた二人は、『仕事だけが人間の存在意義なのか？ 僕たちは、この疑問を世間にぶつけたいという想いでいっぱいだった』」らしい。

### ＜燃え尽き症候群の女優は？その仕事ぶりは？＞

そこで急浮上してきた女優が、一見オマール・シーとのコンビは全くアンバランスながら、シャルロット・ゲンズブールだ。彼女は、ラース・フォン・トリアー監督の『アンチクライスト』（09年）（『シネマルーム26』83頁参照）、『メランコリア』（11年）（『シネマルーム28』169頁参照）、『ニンフォマニアック Vol. 1/Vol. 2』（13年）（『シネマルーム33』参照）で私もハッキリそのヌード姿と共に名前を刻み込んだフランスの名女優で、彼女の雰囲気はたしかに大手管理職なのに燃え尽き症候群に陥ってしまった女性アリス役にピッタリだ。そんなフランスの大女優シャルロット・ゲンズブールがオマール・シーと共演することによって「立場は全く違うけれど仕事こそが最も大事だと考えていた二人が出会い、社会的な成功に左右されない、新たな幸せを見つけようとするというプロット」が出来上がったわけだ。

映画冒頭、レストランの皿洗いから料理人に採用されることになり、やっと念願の滞在許可証がもらえると県庁を訪れたのに、既に不許可の通知を送ったと告げられ、まさかの収容所送りになったサンバの怒りの姿が登場する。続いて、移民支援協会ボランティア団員のアリスが、同じボランティア団員ながら支援活動に慣れている女性マニユ（イジア・イジュラン）と共に、サンバの相談を聞く風景が映し出されるが、そこでのアリスの仕事ぶりはまさに燃え尽き症候群そのもの。こんなボーっとした仕事ぶりでは、ボランティア活動に全然役立たないのは明らかだが・・・。

### ＜サンバとウィルソンの仕事ぶりは？恋模様は？＞

フランスにたくさんいる不法移民の多くは、偽造の滞在許可証を使って仕事にありつき、生活をしていることが本作中盤のストーリーをみているとよくわかる。サンバも伯父から貸してもらった滞在許可証が使えなくなったため偽造カードで働くことになったが、それは、サンバにビルの窓ガラスの仕事を回してくれたブラジル移民のウィルソンも同じらしい。サンバは収容所の中で知り合った男ジョナス（イサカ・サウドゴ）から「2年も会っていない恋人のグラシューズを探し出し、俺の変らぬ想いを伝えてくれ」と頼まれたが、グラシューズから「ジョナスとのことはもう過去のことだ」と言われると、たちまちグラシューズとベッド・インしてしまうほどの女好きだが、根は真面目。

それに対してウィルソンの方は、女が好きなのはサンバと同じだが、性格はチョー陽気で遊ぶのが大好き。本作中盤では、そんな「最強の2人」の仕事ぶりに注目したい。とりわけ、ビルの窓ガラスを清掃している時に、女性ばかりのフロアの窓でウィルソンが見せる、歓声を浴びながらのストリップ・ショーはメチャ面白い。そんなウィルソンだから、当然女にも手が早い。本作の恋模様はさまざまな試練をうけるサンバと燃え尽き症候群の女・アリスとのそれが軸だが、アレレ、いつの間にか、ウィルソンとマニユの二人も…。

### ＜やっと少し安定！そう思ったのに・・・＞

近時はマクドナルド等の外食産業で雇われ働いている外国人労働者の姿をよく見かけるが、出入国管理に厳格な日本では、彼ら彼女らの在日許可の多くは合法的なもの。しかし、大量の移民の労働によって支えられているフランス等の西欧諸国では、外国人労働者の不法就労が山ほどあるはずだ。本作中盤では、本来なら深刻な社会問題として提起されるべきそんなテーマが、陽気なサンバとその「最強のふたり」となるウィルソンによるコメディタッチの展開の中で描かれていく。

面白いのは、そんな2人と接しているうち、燃え尽き症候群だったアリスの症状が少しずつ改善し、笑顔まで見せるようになってくること。もっとも、いつの間にかウィルソンとデキてしまっていたマニユの方は、もともとかわいい系の女優だからそんなストーリーがピッタリだが、『アンチクライスト』、『メランコリア』、『ニンフォマニアック Vol. 1/Vol. 2』でみてきた女優シャルロット・ゲンズブールは顔つきからしてもややこしい役にうってつけだから、あまり笑顔は似合わない。私にはそう思えて仕方なかったが・・・。

### ＜結末は意外にも・・・＞

それはともかく、せつかくサンバの仕事も少し安定し、アリスの燃え尽き症候群も少し良くなり、2人の恋模様もいい具合なのに、そんなところにジョナスがサンバの前に現れたところから、ストーリーは変調をきたしていくことに。そりゃ、恋のキューピッド役を頼んだ友人が、コトもあろうに「俺の女」に手を出したら怒るのは当たり前。サンバはジョナスに対して「グラシューズをいくら捜しても見つからなかった！国外に退去したのでは？」と苦しい言い訳をしていたが、今やジョナスはサンバのそんなウソをはっきり見抜いていたらしい。そこから起きるドタバタ劇と深刻な結末は、コメディタッチの本作には似つかわしくないが、それはそれとして受け止めなければならない現実だ。

さあ、そんな現実を受けて、サンバは移民としての自分の生活にどのような結論を・・・？不法移民というテーマを取り上げた『最強のふたり』のエリック・トレダノ監督、オリビエ・ナカシュ監督とオマール・シーが提示する本作の結末をしっかり確認し、あらためてそのテーマを真面目に考えるきっかけとしたい。

201

4（平成26）年11月18日記